

「子どもに学んだあの風景」より

初等教育資料 平成24年10月号 (NO. 891)

さいたま市立本太小学校教頭 豊島登

健康観察で、「元気」発見

朝の健康観察は、ゴールデンタイム

1人の担任が40名近くの子をきめ細やかに見るということは、実際問題難しい。けれど、毎日、必ず、一人の子どもと向き合える時間があるのです。

それは、朝の健康観察。始業前のちょっとした時間。全員と関われるほんの数分のゴールデンタイムです。

「〇〇さん」「はい、元気です」というのが一般的でしょうか。ここで疑問。「はい、元気です」と言った子どもは、本当に元気なのでしょうか。一言で元気と言っても、元気度のレベルは様々だし、元気なわけもそれぞれ違うはずです。健康観察は、もっとていねいにやってもよいのではないのでしょうか。

あるとき、こんなやり方を試してみました。子どもたちは、今日の健康状態を1から10までの数字で示します（10が元気度MAX）。そして、その数字にした理由を簡単に説明するのです。

「10です。朝ごはんもしっかり食べて、もりもり元気だからです」。「3です。きのうの夜から、ずっとのどか痛いからです」。これは、ダニエル・ゴールマン「EQこころの知能指数」のやり方を真似たものですが、子どもたちは自分の体と対話して、しっかりと語ってくれました。子どもなのだからいつも元気、そんな単純なことではないことを教えてもらいました。

一瞬のコミュニケーションも毎日続けることで

健康観察は、一人につき数秒という一瞬のコミュニケーション。子どもの声に耳を傾け、表情を見る。これだけで、子どもたちから多くの情報を得ることができるのです。期待に胸ふくらませて登校する日もあれば、不安でたまらない日もあるかもしれません。

「8です。元気だけど、算数のテストがちょっと不安だからです」。「10です。きょうの体育の授業がとっても楽しみだからです」。「5です。ちょっと友達とけんかして、もやもやした気分だからです」。子どもは、その時々のお腹に左右されやすいものです。不安のあまりにお腹が痛くなってしまうことだってあるのですから。健康状態は、体だけではなく、心の状態が大きく関わっているのです。

その子が語る言葉には、その子らしさも見え隠れします。健康観察は、児童理解にも役立つものなのだと、私は考えています。



EQこころの知能指数 著者紹介

【ダニエル・ゴールマン】

カリフォルニア州ストックトンに生まれる。ハーバード大学大学院にて心理学の博士号を取得。ハーバード大学で教鞭をとった後、「サイコロジー・トゥデー」のシニア・エディターを9年間務める。1984年からは「ニューヨーク・タイムズ」紙でおもに行動心理学について執筆してきた。ジャーナリストとして数々の賞を受賞。本書はアメリカだけでなく、日本も含めた全世界で大ベストセラーとなった。

【土屋京子】

翻訳家。東京大学教養学部卒。主な訳書に『地球を救うかんたんな50の方法』『ワイルド・スワン』『沈まない太陽』『エンド・オブ・サマー』（以上、講談社）などがある。